ソ連人の魯迅論

(Ⅲ　サローキン)

川上久寿

この稿は,ヴェ・エフ・サローキン(В. Ф. Сорокин)の,≪魯迅のリアリズム≫(О реализме Лу синя)の全訳である。サローキンには,このほか,≪魯迅世界観の形成≫(モスクワ,196頁) Формирование мировоззрения Лу синя という著書がある。≪魯迅のリアリズム≫は1958年のアジヤ・アフリカ作家会議によせたもので,1958年7月号の≪文学の諸問題≫(Вопросы Литературы)にのつている。サローキン氏の経歴については,まつたくわからない,この点,はなはだ準備不足で,恐縮のいたりである。フェドレンコ博士におたずねすれば,きつとわかるであろう。≪ソ連人の魯迅論≫は,まだつゞく予定であるから,後日責をはたしたい。なお,≪魯迅のリアリズム≫は,中国の雑誌≪文学研究≫(げんざいの≪文学評論≫)に,簡単な紹介がのつたことがある。パズネーエワ女史とフェドレンコ氏の魯迅論に,ほぼソ連の魯迅研究の二つの流れがあるとすれば,サローキン氏には,パズネーエワ女史の傾向がある。それは,≪美術意見書≫と≪懐旧≫にたいする見方などにも,あらわれている。サローキン氏の魯迅論で,とくに興味あるのは,形象をつくるあたらしい方法を,分析した個所である。ふるい中国文学の形象創造上の類型化を否定した,魯迅のあたらしい方法を,のべたところは,おもしろい。まえがきにもあるように,みじかい論文に,魯迅の活動の一方面でさえ,述べつくすことはできない。これを,多少なりとおぎなっているのが,まえにあげた≪魯迅世界観の形成≫であり,魯迅の幼年時代の生活からときおこし,文学活動にはいつてから,≪阿Q正伝≫までの魯迅のリアリズムの発展が,くわしく述べてある。≪魯迅のリアリズム≫は,いわば,そのダイヂェスといっ

ていい。

＊　＊　＊

魯迅の作品は，現代中国文学史上，たかい地位をしめており，中国の最も重要な，時代をふくんでいる。

魯迅の作品が，はじめてあらわれたのは，中国を事実上半殖民地にした，≪最終議定書≫の圧迫によっておこった，1900年の義和団事変ののちである。そして，蔣介石グープの権力から，全国が解放される前提条件となった，共産党指導のもとの抗日戦争の前夜，つまり，1936年に彼の活動はとだえた。この35年のあいだに，中国は複雑な歴史的発展の道をあゆんだ。封建的君主政体から，ひろい解放区の建設へ，無自覚な人民の蜂起と武装集団から，プロレタリアートとその党の指導する新民主主義革命へ――これがその道しるべである。

この時期には，中国の精神生活の面で，驚くような変化が，たくさんおこった。じじつ，世界文化におゝくの偉大な貢献をし，幾世紀にわたって独自なものであった中国文化が，近世紀になって危機におちいり，19世紀のおわりには，西欧の科学，哲学，文学と，はからずも，であうことになった。西欧文化からかりた思想が封建イデオロギーのカセをときはなつのに役だった。力づよい反帝反封建の≪5・4運動≫（1919年）とともにおこなわれた文化革命は，中国文学史上エポックメイキングなものであった。祖国の運命を憂えている，あらゆる誠実な作家たちの心をとらえたものは，人民につかえる思想，社会的および政治的進歩のために，たゝかうことであつた。≪5・4≫ののちに，先進的中国文学は，社会主義リアリズムへと発展し，この方法によって，みのりゆたかな成果をおさめている。これは，イデオロギー，文学，芸術，科学の分野で，魯迅がなしとげた，ほんとに革命化された，おゝきな仕事のおかげである。

毛沢東は，魯迅の多方面にわたる活動を強調して，いっている。魯迅は≪偉大な作家であったばかりでなく，偉大な思想家であり，偉大な革命家であった≫[1]，雑誌の論文という，かぎられた範囲では，魯迅の多面な活動のうちの，

（1）　毛沢東選集，第3巻，外文出版所，モスクワ，1953年，256頁。

一つでさえ，くわしくのべることができない。本論の目的は，魯迅の創作方法の形式と基本的特徴を，いくつかあきらかにすること，かれがその主な文学作品――≪吶喊≫（1923年）と≪彷徨≫（1926年）の小説集――に，どのようにあらわれているかを，あきらかにすることである。

＊　＊　＊

魯迅の，さいしよのすぐれた短篇――≪狂人日記≫――は，作者が37歳の，1918年にかいたものである。思想的探求の時期が，ながかったので，政治生活，文学・評論および翻訳の仕事はそれだけすくなかった。1898年に周樹人（これが将来の作家の本名である）は故郷を去り，中国ではじめての学校の一つ，西洋式の技術学校にはいつた。それまでに，かれは地主の子供として，ふつうの形式的な教育をうけていた。もし家庭をおちぶれさせた，不幸なできごと（お祖父さんの逮捕入獄と父の死）が，おきなければ，役人への道が，まつていたかもしれない。しかし，魯迅は十七八歳のころ，正しい科学の基礎をしり，のちには，これまでの中国にない，あたらしい政治や社会の理論を，しるようになった。進化論の思想が，当時の彼に，おゝきな影響を，しかもながく，あたえていたようである。魯迅の理解するところでは，進化論は社会の革命的改革の可能なことや，さらには，その不可避性と，かゝわりないものではなく，かえって，革命的改革の原動力であった。かれは階級斗争をみとめず，むかしからある，ふるい世代とわかい世代とのかつとう，生存するものが，すべて，完全さをもとめているものとした。この誤った観点は――これについてかれの意見や作品が証明しているように――わかい時代にその考えをしらべ，なおそうとした，しるしがありはしたが，，完全にうち勝てたのは，かれがマルクス主義の立場にたった20年代のおわりである。

祖国の人民の解放事業に，いくらかでも，やくだつようにと，1920年日本へ留学したとき，医学の勉強をはじめたが，のちには，文学に身をさゝげることにした。愛国主義の傾向をもつ，在日中国人学生たちの雑誌に，哲学と文学や自然科学に関する，魯迅の論文が，1907年から1908年にかけて，つぎつぎと

あらわれた。わかい作家は，封建的君主政体と清朝の敵となり，科学的業績を熱心に宣伝し，祖国の人民大衆が，うるわしい将来をかちとるため，たゝかいに，たちあがることをねがった。さいしよの翻訳のうちの一つ（ジュール・ベルンの≪月界旅行≫，1904年）の序で，魯迅は≪伝統的迷信をうちくだき，よい理想をひろめ，……中国人民の進歩をうながす≫というかんがえを，めざめさせるために，科学空想小説を翻訳した，といっている。科学知識とおもしろい筋と，むすびついた小説を，一般の青年にひろめることによって，じぶんのねがいは，実現されやすい，とかんがえたわけである。この考えが，あまりにも，幼稚であったにしても，作者が文学の社会的役割に，おおきな関心をむけていたことに，注意しないわけにはゆくまい。

さらに発展した魯迅の文学観と，その社会生活じようの地位は≪摩羅詩力説≫（1908年発表）という，力作に，みることができる。≪中国で精神領域での戦士をみつけだそうとしてみるがいゝ！……つめたい荒はてた場所から誰がわれわれをつれ出すことができるのか？　国は荒廃している，しかし，わが国には最後の聖歌をつくり，われわれについて，のちの世の人に語るエレミヤはいない。このような戦士はまだ生れていないのかもしれない，あるいは生れるとすぐ，ほろぼされて，しまったのかもしれない。≫たとえば≪精神領域の戦士」を，魯迅は世紀はじめの偉大な詩人――バイロン，シェリー，プーシキン，レールモントフ，ミツケヴィチ，ペテフィーにみている。≪サタン≫を論争にうまくもちこみ，バイロンをかしらとする，イギリスの革命的ロマンチストをあげて，魯迅はこういっているかのようだ，たしかに，これらの詩人は，社会に反抗した，サタンが神がみに反抗したように。しかし，かれらの生涯，かれらの天才は，人民の解放事業にもちいられたからこそ貴い，と。

これまでの中国文学にたいする，魯迅の評価は，ひどく否定的である。詩人たちは，≪すばらしい感情とたかめられた思想≫を，読むものゝ心にはぐくむことをしないで，≪支配者をほめたゝえ，権力あるものにおもねった≫，とかれはいつている。文学は≪人間ののぞみをあらわさないで，くさりとむちの権力のもとで自由をゆるした≫。魯迅は，古代の偉大な詩人屈原を，例外とし

ている。というのは，屈原が，≪禁制をものともせず，大胆に，不完全な世界をばくろした≫からである。魯迅は支配階級にこびている生命のない文学をにくんだが，それとは反対の屈原の作品のようなものを書いた，ほかの文学者も例外であることはいうまでもない。しかし，魯迅が現代中国作家の作品にもとめた，鮮明で新しい特徴をつくりあげるために，かれがこゝで，過去の文学のわるいところをとりあげたことは，たいせつであった。

≪摩羅詩力説≫で，魯迅は，現存道徳に反抗し，自由愛好，抗神，叛乱の精神を強調している。レールモントフの≪悪魔≫，シェリーの≪絆をとかれたプロメチウス≫とバイロンの≪奇蹟のカイン≫のような，思想の独立とほんとうの知識をもとめる堂々とした戦士の形象が，かれの注意をひきつける。魯迅は詩人たちの創作の道を,社会活動とむすびつけてかんがえているが,このばあい，解放運動に参加した事実と，権力と保守的社会が，詩人たちを迫害したことを，つよく述べている。

ロシヤ文学に関するところは，とくに強調する必要がある，なぜなら，それは中国でロシヤ・ソヴエト作家を普及したという，おゝきな仕事の基礎となったからである，魯迅はこの仕事を死ぬまでつゞけた。魯迅がロシヤの古典に注意をむけたのは偶然ではない，それは，世界帝国主義が支援している，半封建的君主制が，人民の主な敵となっていた20世紀10年代のロシヤと，中国の革命情況がいちじるしく似ていたことから，あたりまえであった。

魯迅は，19世紀に，ロシヤ文学の花が，ひじようにはやく，ひらいたことをいつている。≪あたらしいロシヤ文学は，世紀のはじめにおこった，それはたえまなく，独創性を発揮して，日々に花をひらき，げんざいではもう，その美しさと偉大さのため，西欧じゆうが驚いており，最も先進的な諸国の文学の，先頭にたっている≫。魯迅はとくに，ゴーゴリの作品の社会的意義を述べて，それをながい間まったくひらく力をうばわれていた，ロシヤ人民のつよい精神力のあらわれ，とみなしている。しかしこの文章では，ゴーゴリの最も一般的な特徴だけにとゞまっている（のちにかれは，何回となく，ゴーゴリの創作について，のべている，≪死せる魂≫は彼の最後の翻訳であり，そして未完

稿となった)。プーシキンとレールモントフの散文についても，くわしくのべてはいない。早期のプーシキンの詩≪ムツィリ≫と≪イズマイール・ベヤ≫の，反抗的で高潔な主人公たちに同情していたのに，プーシキンとレールモントフの散文についても，くわしいことはかいていない。バイロンを≪サタン≫のかしらとみなした魯迅は，東欧諸国の歴史的条件を説明しながら，東欧詩人の作品の独自性を強調している。一年たつてから，魯迅はガルシンとコロレンコの短篇集の翻訳を出版した。これはロシヤ・ソヴエト文学を中国に紹介するという，かれの献身的な仕事のはじめであった。

西欧の文学をしったばかりの若い作家の仕事には（そのうえおゝくは日本語訳をとおして），誤りや西欧批評家のまちがった立場をそのまゝとりいれているところがある。しかし，中国では，この論文がすぐれた改革的意義のあることを，魯迅はうたがわなかった。すなわち，そこには，自由を愛する詩人の歌ごえ，被圧迫民族が独立のためにたゝかう歌ごえ，中世道徳のきずなから人間を解放する熱烈なよびかけが，なりひゞいていた。

この時期の魯迅の政治的観点が，いちばんはっきりと，あらわれているのは≪文化偏至論≫（1907）年である。かつての中国の勢力をとりもどすために，工業をおこしたり，憲法を実施することによって，中途半端な改革をめざしている人びとを反駁して，魯迅は，鉄道も国会もそれだけでは国を救うことができない，といった。おゝくの中国革命家たちには，ブルヂョア民主主義国家がまだ理想の国家機構であったとき，魯迅はその欠陥を見とおすことができた。≪世論の力は，ずるくてどこへでももぐりこむ野心家や愚かな金持，あるいは，ぬけめのない商人といった，独占家たちに委ねられている……むかしは一人の独裁者が人民の上にのしかゝっていた，いまでは千万のつまらぬ連中がとって代つている≫。

魯迅は≪人民の国≫をつくるという，人道的な望みを実現するため，道をさがしもとめた，その人民とはこのことばの最高の意味で，自由であり，全面的に発展すべきものであった。しかし，当時はまだ，中国のプロレタリアートが組織された政治力となっていず，自覚した革命運動は，大衆的になっていな

かった。魯迅がある時期に，あたかも個性の解放の道をきりひらくことのできるような，唯一の創造者をおもい，その思想に心をひきつけられていたことは，あやしむにたりない。こうして，かれにはイプセンの医者ストックマンとニーチエの≪超人≫があらわれた。革命文化のすぐれた活動家瞿秋白は，すでに25年前に，魯迅の≪個人主義的≫観点の基礎は，ニーチエ主義にあることを正しくもしめしている。魯迅は個人主義を人民大衆の利益をまもるたゝかいの武器とみなしていた。かれはとてもながい年月をかけて，この誤つたかんがえにうち勝たねばならなかった。しかし基本的にかれの立場は革命的民主主義であった。このことは，在日中国人の政治闘争にかれが加わっていたこと，中国の君主専政をうちたおした辛亥革命の頃のかれの活動によってもわかる。

1911年10月にはじまった革命を，魯迅がはじめのうち歓呼してむかえたことは，できたばかりの新聞≪越鐸日報≫に書いた≪読者に訴える（≪越鐸≫出世辞）によってもわかる。外国にながく圧迫されたのち，と魯迅はかいている，国民は≪偉大な自由を三つみつけた……人民は元気づき空の太陽でさえ狂喜している≫，共和国ができあがるとともに，と魯迅はつゞける，≪人それぞれが国家の主人公である≫，国家の運命にたいする責任は国民ぜんぶの肩にかゝっている。≪本紙発刊の趣旨は，自由な言論に広場をあたえ，人間の自然の権利をもちい，共和国の発展をうながし……社会生活の暗い面をあばき，剛毅不屈の精神をふるいおこさせ，ほんとうの知識をひろめるにある……≫[1]

はじめての意見として，魯迅はこゝで進歩知識の普及についてのべた。しかし，いまでは，それを実現するためには政治闘争と生活の否定面をばくろしなければいけない，とみてとっている。魯迅の美学的観点の発展をしめす重要な意見のかずかずは，かれが共和国政府の文部省ではたらきはじめた1912年のおわりに書いた≪美術意見書≫（擬播布美術意見書）にもふくまれている。人民大衆に中国と世界の美術を普及するという遠大な計画をもくろんだ魯迅は，この文章で美術の本質とその使命にたいする意見を述べている。かれは芸術の

（1）「文芸月報」，1956年，第10号，3頁。
注釈つき魯迅全集第7巻271～272頁。

素材によって客観的現実 ――かれの言葉によると≪本性の創造≫をかんがえている。直接の感性的知覚が芸術家によって≪思考分析され≫，のちには≪美学化≫される。あとのほうの術語を魯迅は自然界の例で説明している。われわれの観察する事物はみな，完全なものとして存在しているとはかぎらない，葉は黄色くなり，花はしぼむ。しかし芸術家の任務は≪適当な≫形象をつくることにあるから，一定の形象を再現するために本質上かくことのできない，事物の特徴だけを正しくとりあげることである。この言葉は芸術形象を創造する基本的方法となっている典型化に関してのべているので，これは，リアリズム美学の最も重要な基本的主張を，かれがみとめていたということになる。魯迅は自然を自然主義的に模写することに反対し，また形式的なゴマカシにも反対した。たとえば，玉をきざんで木の葉そっくりに切りとったり，あるいは，一塊の象牙に一万の漢字をぜんぶおさめることは容易でない，しかしそういうことをしてみても，まだ芸術ではない，といっている。

もちろん，≪美術意見書≫（擬播布美術意見書）は魯迅の円熟した文章とはいえない。これには不明瞭な方式化とともに，ほかのものと直接矛盾するところもある。魯迅が文学の社会的はたらきをくりかえし強調しているにもかゝわらず，芸術のほんとうの特殊目的は，≪人間を楽しませること≫である，といっているのは意外である。これはあきらかに，美学領域の最も観念論的な思想が，若い魯迅に影響をあたえたものとみなければならない。しかしこの論文は基本的には芸術を唯物論的に解釈することを主張し，周囲の現実から一般化されたほんとうの形象をつくることを，芸術家にもとめている。これにより文化革命のはじまるまで，魯迅が当時支配的であった観念論美学に公然と反対していたことがわかる。

これと関連してひじょうに興味があるのは，≪意見書≫のほんのすこしまえに，むかしの文語で書いた≪懐旧≫という魯迅はじめての小説のあることである。

この小説は，まる暗記でいためつけられ，先生がいやでたまらない子供の口をかりている。≪長髪賊≫（19世紀なかばの太平天国革命に参加した者はこう

よばれた）の軍隊が村に近づいた，という噂がひろまると，かれにはそういう可能性ができる。しかし噂はたんなる噂にすぎないようだった，数日後にはまた，いやな授業があった。読めばわかるように，題材は簡単で，小説のスケールはちいさい，しかし，魯迅は経験ゆたかな作家でも，うらやましいほどの技巧で，心理的特徴を発展させている。率直な子供と用心ぶかい老僕がうまく書いてある。これにたいして村の先生，儒教徒の≪禿げ先生≫とその友，成金の金耀宗のケチでおくびようなところの描写には針をふくんだ皮肉がはさんである。この形象描写には将来の偉大な風刺家がみられる。魯迅は伝統的教育のスコラ的な制度をわらっているばかりでなく，儒教の道徳家の偽善と日和見をみせている。≪禿げ先生≫――仰聖という悪意をふくんだ名前そのものが皮肉である。というのは，かれが≪孔子に頭をさげているよりは≫地方の金持に頭をさげているからだ。このように，さいしよの小説にさえ，魯迅の作品ぜんぶを赤い糸となってつらぬいている，反封建イデオロギーのテーマがある。

このほかおもな特徴は，革命の敵の戦術をばくろしていることである。ずるくたちまわって，太平軍の御気嫌をとった金耀宗の父，また憎んでいる≪長髪賊≫に出くわしたならと，お世辞のことばを用意している仰聖のくだりでは，支配と権力をまもるためには，どんな仮面でもかぶる敵にたいする革命陣営の警戒心をうったえているかのようである。このけねんは彼の予想よりもはやく実現した。辛亥革命ののちまもなく，人民の要求をかなえられないまゝ，権力は，≪革命家≫のふりをしていた袁世凱と地主，買弁出身の手先に移つた。祖国の改革という魯迅の期待ははずれた。幻滅したかれは何年か文学と社会活動をはなれ，古代文献の研究にとりくんだ。1919年の「5・4運動」でたかまった民族解放闘争が作家生活へひきもどしたのである。

≪5・4運動≫のさい，魯迅は中国インテリゲンチヤの革命的・民主的陣営の思想的指導者の一人となった。雑誌≪新青年≫で中国ではじめてのマルクス主義者たちに協力したことは，魯迅の社会的・政治的観点をいつそう発展させたように思われる。≪5・4≫時期と20年代の前半頃の多方面にわたる雑文で，魯迅は被圧迫人民のまえにたちあらわれ，ふるい中国の精神生活の命数の

つきはてた，反動的なものを無慈悲にばくろし，不正な社会機構と，そのほろびゆく運命をさらけだし，あたらしい生活のため身をなげだしてたゝかう，戦士の勇気をほめたゝえた（魯迅じしんもあたらしい生活の輪廓とその建設の道が当時はまだはっきりしていなかった）。

魯迅は小説集≪吶喊≫と≪彷徨≫時代の小説で，ほかの方法によりこの任務を解決した。現象的にはひじように多様な中国の現実の深刻な意義，政治的戦士の経験，人間にたいする身心をなげだした愛情，人間がしあわせになることを妨げているものにたいする，やきつくすような憎しみ，自国および外国文学の宝を完全に自分のものとしていたこと，これらのことによって魯迅は円熟した高度のリアリズム文学の形象をつくり，その才能を発揮することができたのである。魯迅の作品は中国文学の発展上あたらしい高度の段階をひらいた。

魯迅の作品には中国の社会がみなおされている。かれは生活のあたらしい分野，つまり，これまで表現するに値しないとみなされてきた，あたらいし人間を文学にみちびきいれた。ちよっとみると単調で，ちようど人里とおくはなれた町や村のみすぼらしい茅屋に住む人びとの，精神的なものはなにもないような生活に，魯迅は深刻な人生と独創的な詩が，かくされているのをみた。魯迅はかれらの悲しみ，かれらのひめられた，それとはいえない望みをしっている。≪四千年のあいだ，巨大な石に圧しつぶされて，ひよわい，しぼんでしまった草みたいに，黙りこくつてきた≫人民が，声をだして話しはじめた。この石をおしのけ，人民がまっすぐになれるようにすること，それを魯迅はじぶんのしごとにしたのである。

中国には，魯迅のまえにも，時代の多面的な生活をはっきりと形象化した，偉大な作家がたくさんいた。≪紅楼夢≫（18世紀），≪金瓶梅≫（16世紀），関漢卿のドラマ（8世紀），唐の市民的打情詩，元稹と白行簡（8－9世紀）の小説はそのつよい真実性により，中国文学の傑作に入るものである。これらは社会の不正にたいする直接的ないきどおり，作家の同情心，人民のための溢れるような力で人をうごかす。しかし，中国社会の基本的矛盾がすっかりあらわにされていないというならば，これらの偉大な作品の意義を軽くみるこ

とになろう。それは作家の才能や生活の智慧がたりなかったからではなく，その時代の社会関係の発展段階によるものである。悲惨な貧農の運命については，むかしでも，魯迅の時代でも，たくさんの作家が語つている。しかし，かれらは人民を同情すべきものとしてながめ，傍観していることがおゝかった。かれらが≪窓からながめた≫ように，人民も作家を≪紙きれで区別した≫（詩人劉半農のことば）のである。これらの作品のライトモチーフは憐れみであった。

こゝで強調しなければならないのは，魯迅より前の作家たちのおゝくが時代のすぐれた思想家・ヒューマニストであり，かれらがみな人民の不幸を戦争の結果や，天災または≪悪い≫政府の影響とみなしていたことである。かれらは人民の苦しみのほんとうの原因が封建制度そのものにあることをしらなかった。したがって，かれらの批判はその勇気にもかゝわらず不徹底であった。白居易も柳宗元（8世紀——9世紀）も，≪水滸≫の豪傑たちも，不幸なものゝ訴えに耳を傾ける≪明君≫に期待をかけている。これは封建制度の破滅があきらかとなった清代の作品にもみることができる（19世紀のおわり——20世紀のはじめ）。この時代の特徴となる≪暴露小説≫のうち劉鶚の≪老残游記≫をとってみよう。これは20世紀はじめの作品で，そのころ魯迅は文学活動をはじめていた。この小説はその頃のほかの作品のように，あらゆる矛盾とともに清朝専政の最後の10年間の農民の運命をはっきりさせている。劉鶚はありとあらゆるおもい税金とわいろをくわしく書いて，むごい政府の役人に烙印をおしている。しかし，人民を救済する道になると，これらの役人を清廉で人間味のあるほかの人にとりかえるよりほか，なにもできない。最も進な歩的ほかの≪暴露小説≫作者でさえ，これよりも急進的な方法についてはいえなかった。

魯迅のおもな任務のひとつは，ふるい中国の人間関係の本質に大胆に，しかも深くはいりこむこと，また，むかしからの被圧迫者と圧迫者の対立をしめすことであった。かれのいうところによると，ロシヤの古典文学の恩恵をうけている，こうして彼は有名なつぎの言葉をいっているのである。≪その（ロシヤ）文学から，われわれは，いちばんたいせつなこと——世界には二つの階

級，圧迫者と被圧迫者のあることを知つた。この発見は偉大である。それはちようど原始人が食物の煮焼きをはじめ，暗い夜があかあかとした炎で明るくなったときの火の発見と同じであった。魯迅の任務は，この対立の特殊な，中国的形式をあばきだすことにあった。この傾向の第一歩として，魯迅は≪吶喊≫の≪狂人日記≫を書きあげたのである。

≪県知事に足かせをはめられ，地主に顔を殴られ，お巡りに妻をうばわれ，高利貸に責めつけられて死んだ父母……≫，こういう中国人民の悲劇を具象化するため，魯迅は力づよく，深刻にあらわされた形象をもちいた。これまでの中国文学に，これほど力づよい説得力をもって，≪喰うもの≫と≪喰われるもの≫との対立をえがいたものはなかったし，それにもまして注意しなければならないのは，暴力と不正の特殊なばあいとしてゞはなく，封建中国の普遍的法則として，えがかれていることである。

≪狂人日記≫でこのテーマは作者の宣言のかたちをとり，一般的なプランにしかなっていない。その主な内容は，戦闘的ヒューマニストの死にもの狂いのたたかいであり，まわりのあらゆる悲惨な出来事を意識して，≪人を喰うもの≫の社会に抵抗していることである。このヒューマニストの悲劇は，人びとを救おうとしたにもかゝわらず，それがわかってもらえなかったことにある。かれに残されたものは，将来は≪ほんとうの人間≫になれる，まだ堕落していない子供に期待をかけることだけだった。魯迅のこうした将来への希望には，もし，ほんとうの人が人喰いという人喰いを追いはらつてしまえば，搾取の制度はなくなり，たとえまだ漠然とはしていても，ある社会の理想がもち出されてくるということがあった。この小説が中国の解放運動のたかまりのとき，偉大な十月革命の数カ月後に書かれたのは偶然でない。ロシヤ人民の英雄的なたゝかいが，ロシヤ文学をとおして，偉大な北方の隣人に共感をいだいていた魯迅を喜ばせはげましたことはうたがいない。一年後に，魯迅は十月革命にはじまる歴史的事件に，≪新世紀のはじまり≫，≪あけぼの≫を見て，この歴史的事件にたいする自分の考えを率直にあらわした。

魯迅はその後の作品で，≪上流社会のもの≫と下層社会のものとの，あい

いれない対立を，ますますしかも具体的にえがいている。それは≪祝福≫の祥林嫂の悲劇に，農民閏土（故郷）の生活の，悲しい物語に，また，金もちの趙旦那に無慈悲に捲きあげられる，笑うべく憐むべき阿Qに，最も深刻にあらわされている。これらには，さまざまな人びと，題材，いろあいがある。しかし魯迅は，どの作品でも，ふるい機構を否定する，ということでは非妥協的である。魯迅作品のどれ一つをとっても，現存秩序のワクのなかで解決をはかろうとはしていない。阿Qと趙旦那のなかをうまくゆかせ，祥林嫂や閏土の苦しみの原因を，いますぐにもなくしようとすることが，はたしてできるであろうか。反対に，魯迅は≪故郷≫で，≪われわれのしらない，あたらしい生活≫になってはじめて，農民の息子と主人の子供がほんとうに平等になれることを強調している。

辛亥革命によっても≪あたらしい生活≫にはならなかったことが魯迅の小説ではくりかえされている。≪風波≫は1911年の革命が農民になにもあたえず，かゝわりのないものであったことを証明している。満洲人へのれい属をあらわす弁髪をきったゞけで，むかしながら村の生活や政治は一向変らずじまいであった。≪阿Q正伝≫ではもっとはっきりしている。≪革命党は町を占領したが，だいじなことは，なにひとつ変らなかった。もとの大隊長が同じ兵隊を指揮し，県知事は居坐つた，変つたのは職名だけだった。さらに挙人旦那も官途についた。これらのあたらしい地位がどういうことを意味するか，未荘の住民はわからなかった≫。反人民的政権のかわりに，ほかのものが政権の座についたにすぎず，人民はあずかりしらぬことだった。

じじつ，この小説には，弁髪をきることを人民に強制した，≪よからぬ≫革命家たちのことが何回となくでている。じつさいは，この人たちこそ，革命的傾向をもっていたと，いわねばならないであろう。しかし，かれらはあきらかによわくて，あたまかずもすくなかった。≪自由党≫はといえば，あまりにも人民大衆に縁がない。未荘の住民はこの党の目的をしらないのはもちろんのこと，≪自由（ツーイオウ）≫ということばさえ，わからないので，発音の似ている≪柿油（シーイオウ）≫とまちがえるしまつである。

ふるい型のブルヂョア民主主義革命の辛亥革命にたいする魯迅の批判は，中国文学のうち最も深刻である。魯迅は中国の勤労大衆，なによりも農民の立場にたっており，人民がほんとうに，じぶんの力をのばすことのできる，あたらしい革命をうったえた。

＊　＊　＊

早期の作品にはじまった魯迅のイデオロギーのたゝかいは，≪文化革命≫時代にはもっと戦闘的，攻撃的性質をもつようになった。≪5・4運動≫で活躍したおゝくの人びとのように，魯迅がまっさきに反対したのは，形式的な儒教のドグマであった。こゝでは第一に≪狂人日記≫をあげなければならない。主人公はながいあいだ儒教道徳の教えにとらわれていた，しかし，かれはうたがいだす。≪……わたくしは歴史の本をひもといた，しかし本には日付がなく，どの頁にも≪仁義≫，≪公正≫，≪道徳≫，≪徳≫の言葉が書いてあった。どうしてもねむれないので，夜どおし注意ぶかく読んでみた。すると，どの本の行のあいだにも，一つの言葉，≪人を喰う≫が書いてある≫。もったいぶり形式ばった言いまわしで，君主やひろく≪君子≫の行いの規範となっている儒教倫理のいちばんたいせつな観念を，魯迅は≪人を喰う≫ことにほかならないとした。新文化のためにたゝかった人びとのうち，だれひとりこのように大胆な批判をしたものはいなかった。

封建文化のいろいろいろな面を多少なりと批判した以前の中国作家と魯迅が区別されるのは，かれがふるいイデオロギーに妥協しなかったからである。呉敬梓の有名な≪儒林外史≫（18世紀）は試験制度や役人としての出世と空虚な議論に熱中しているエセ学者をするどく風刺している。この小説の内容を客観的にみると，社会制度とむすびついている儒教への激しい打撃とみていゝ。しかし呉敬梓が儒教イデオロギーに反対しなかったばかりでなく，この教えのほんとうの精神をまもり，国家機構内の≪本物≫の儒教徒に魅力を感じていたということで，その批判力はよわまっている。19世紀おわりの改革運動とむすびついた作家たちは，中途半端な考えのため，反動的イデオロギーにたいし雄

々しくたちあがることができなかった。

このため，魯迅の作品にあらわれている改革思想のこえは，その時代の人たちにふかい印象をあたえた。積極的に文化革命に参加した呉虞は≪狂人日記≫の出版後すぐ，こう書いた，魯迅は≪礼儀道徳を重んずるような仮面をかぶって人を喰う詐欺師やペテン師のベールをはぎとった≫。また魯迅の作品をはじめて研究した銭杏邨は≪ものすごい破壊力をもつ爆弾≫とよんだ。作者はこの爆弾を≪当時の封建勢力≫の陣地へいきおいよく投げつけたのであった。

魯迅はまた≪孔乙己≫で封建イデオロギーの害毒を書いている。主人公は貧乏インテリの孔乙己である，かれはわかいとき官吏として将来有望な国家試験を何回もうけ，運命をきりひらこうとしたが，うまくゆかなかった。支配階級の幻想がしみついているかれは，貧しいものにはとうていみこみのない夢を実現しようとし，たまさか盗みをはたらいては飲み代にあてゝいる。孔乙己とその仲間の悲劇には，深刻な社会的結果をもつ，ほかの面があった。それはなにかというと，インテリを人民大衆からひきはなして，人民を支配し，孤立させてしまう官僚思想にもとづいた教育制度である。魯迅はある評論で，儒教哲学者孟軻（孟子）の有名なことばをひきあいにだしているが，これはそういう思想をよくあらわしている。≪中国の聖人と学者は率直明瞭に語つた，精神労働にたずさわるものは人を治め，肉体労働にしたがうものは人に治められる。治められるものは人に喰べさせ，治めるものは人に喰べさせられる。≫孔乙己は物質的には魯鎮でいちばんまずしいものと，なにもかわりはしなかつたが，尊大にふるまい，うわべを飾ろうとし，じぶんには教育があるからとくべつで，学のないものには窃盗と思われることでも≪学のあるものには何でもない，あたりまえのこと≫であるらしかった。この尊大さは，もちろん，まわりのものの敵意をまねいた。こうして，酒屋の常連たちには，たえず嘲笑われ，はずかしめられる。

もし孔乙己とその仲間≪白光≫の陳士成がギセイ者だとすれば，魯迅はほかの作品で，悪を直接つくりだしているものや，その手だすけをしているものどもの画廊をひきだしている。それが四銘（石鹸），魯旦那（祝福），それに≪

阿Q正伝≫の趙旦那と息子の≪ニセ毛唐≫である。かれらはどれをとってみても嫌悪にたえないが，ぜんたいとしてみれば，偽善，残酷，貪慾にみちたふるい中国の支配階級のすがたを集体的にあらわしている。これらの形象にはいきどおりの風刺がある。しかし魯迅の直接の嘲笑や非難はまずどこにもみあたらないし，これらの人物のおかれているカリカチュア的な境遇も強調されていない。作者はつねに，≪旦那≫たちに敬意をはらっている，しかしこの尊敬には打撃的な風刺の嘲笑いがかくされている。

魯迅はしばしば，ある人物のことばや行いを，自称道徳家の道徳原理と対比して，風刺的にばくろしている。このばあい，作者は直接この対比をおこなわず，読者がたくみにじぶんの意図するものをひき出すことを期待したものとおもわれる。たとえば，≪阿Q正伝≫には趙家の辛亥革命にたいする関係をえがいている場面がある。忠臣——まして学問があり国家の要職にあるもの——は，王朝がくつがえつたばあい，ほろんだ君主のあとを追うか，または権力をうばつたものへの協力を拒むぐらいのことはしなければならなかった。ほろんだ君主のために，忠勤をはげもうとした人びとのために，≪遺老≫ということばがあった。

趙≪秀才≫はいったい何をするのか？　彼は皇帝の徳をたゝえる竜牌をうち砕き（ついでに銅の香炉ももちさって），≪自由党≫に入いる。しかし，≪よからぬ≫革命家たちにひったくられ，おまけに弁髪もきられてしまう，つまり，いまはほかの連中が≪いゝご身分≫になっていることをしつている，かれと父は，むかしのよき時代に愛着を感じた≫。かれらがどんなにりつぱな主義をもちだしても，反革命家であることをかくせなかったし，その行いがことごとく打算によることを，作者はまざまざとえがきだしている。

阿Qと趙家の取引の場面では，魯迅の風刺が高みにたっしている。みじかい応答と作者じしんの見解——形式的には人を傷つけない——で，作者は≪社会の柱石≫のチッポケな根性，偽善，猿智慧，貪慾を，すぐれた芸術的手腕であばいている。まずはじめからとても特徴的である。≪趙旦那は晩飯のとき秀才と，阿Qととりひきするのはよくない，戸じまりを厳重にしなければなら

ない，といった。あの男にはほりだしものがあるかもしれない，まだいゝ品が残つているかな≫。けっきよく，挙人は阿Qがドロボウとしっているか，すくなくともドロボウだろうぐらいには思つている。だからといって，阿Qの手もとにいゝ品がありさえすれば，むしろとりひきをしたいのである。これが未荘の道徳家たちの道徳なのだ。

儒教イデオロギーと旧習にしがみついた死んだ権力が，文字どおり，あらゆる生活面にゆきわたっていた。きびしい≪男女の別≫や子供のうちに両親がきめた結婚は，若ものから愛のよろこびをうばいとった。魯迅の小説に主人公たちは愛情をテーマにした≪傷逝≫があるのは偶然ではない。≪傷逝≫では愛情も，はじめのあいだは，つよく明るかった，しかし，物質的欠乏とつめたい社会の敵意にはたえきれず，子君は愛人のもとを去つてゆく。≪離婚≫の田舎娘愛姑も正しいことを主張しようとしてやぶれる。しかしこれは，子君と涓生の愛情とおなじく，長年にわたる儒教の教えと偏見が根本からぐらつきくつがえろうとしていることをものがたりはじめている。

*　　*　　*

真実がどんなに，いたましいにしても，真実を書くというスローガンに忠実な魯迅は，人民大衆をえがくばあい，ながい圧迫が人の心に涙をとどめずにはおこなかったことを，憚かることなく指摘した。宿命論や野蛮な迷信があり，さらには人民の利益のためにたゝかっている人を理解できず，かえって，うとんじ，敵意さえもつ人がいる。魯迅はそれをよくしっていた。≪薬≫がその例である。こゝには，処刑された革命家の血で，肺病の息子をなおそうとする，貧しくて無知な人びとがいる。≪頭髪の話≫では俗物たちが愛国者を嘲笑し迫害する。まるで彫刻みたいな，おどろくべき描写の≪ひきまわし≫では，人びとが鈍感と無関心さで，じぶんたちを幸福にしようとして罪をきせられた男をみつめている。独創的な阿Qはこの例としては最も輝かしいものである。

阿Qの精神的特徴，≪阿Q主義≫（このことばは魯迅の小説がでてからすぐにできた，これは阿Qという形象の世わたりの秘訣である）の特徴は第一に

≪精神勝利の理論≫である。この≪理論≫の本質は，はずかしめられたものが，なにかと口実をもうけて，じぶんのほうが，精神的にずっとすぐれていると思いこみ，自らなぐさめることにある。阿Qは敗けぱなしでいたいわけではないが，できそうなことを考えても力たらずというありさま，それで，じぶんの失敗をごまかして，なるべく早く忘れたいのだ。生活の矛盾をさけ，解放のたゝかいをしないということに，革命的世界観に全く対立する，阿Q主義の最も重要な特徴がある，魯迅が風刺しているのはこの点である。

しかし，こゝで疑問がおきる。趙旦那や≪学ある≫息子のような地主たちの支配する未荘のあらゆる生活慣習が，阿Qの精神的特徴を生みだしているのにもかゝわらず，魯迅が風刺の主な対象として不幸な作男をえらんだのはどうしてだろうか？　魯迅はどうして，阿Qやその同類の精神的欠陥のもととなるものをまっさきに批判しなかったのか？　その理由は，魯迅じしんが言つているように，大衆の心の否定面をもふくめ，大衆の前進を妨げるものはみな，なくしてしまいたいという，人民を愛する心からでたのであった。魯迅の批判はその假借なさ――人民の美点には作者の愛情があらわれている――にもかゝわらず，畸形的現象にたいするきびしいいちずな愛情がある。。こゝに，封建的反動家のエセ愛国主義，中国の土地に生れたというだけで，おくれた不合理なものでも，みんな讃美し，中国の民族的特性をひろめ宣伝している人たちと対立する魯迅の革命的愛国主義がある。

これとともに，魯迅の作品には批判的方法があるだけで，積極的主人公がつくられなかったかのように思われるかもしれない。じじつ，このような形象は魯迅の作品にはすくない，しかし，魯迅の小説に共通する構想と傾向をきめるために，それを分析することは，たいせつである。こゝでは，満洲人の権力のため牢獄に放りこまれた若い革命家夏瑜が出てくる≪薬≫だけにとゞめよう。夏瑜は小説のどこにも直接あらわれない，しかし夏瑜はまぎれもなく主人公である，じぶんの運命をほかの登場人物としっかとむすびつけていること，この印象の思想的内容がひじようにおゝきい，ということで主人公になる。登場人物の話で，夏瑜の精神と人格があきらかになる。たとえ理解されなくても，

人民にかぎりない愛情をいだき，死に直面しても揺がない勇気と，事業の正しさ，勝利の信念をもっているかれである。この確信があればこそ夏瑜は獄中でも憂国のおもいにかられ煽動をやめなかった。主人公は死んだ，しかし人しれずその墓に献げられた花輪は，かれの事業が死なかったことを物語つている。≪薬≫とむすびつけ，魯迅がその雑文で≪革命の先駆者の命にしたがった≫のみならず≪それを重んじ，みずからすゝんで≫といつているのは偶然ではない。

魯迅以前の中国文学で，人民は搾取,暴力,偽瞞の対象としてえがかれたにすぎなかった。そのほとんどは想像もできない重圧，非人間的な条件のもとで生活しなければならなかった人民が語られていた。少くとも魯迅は≪祝福≫の祥林嫂，≪故郷≫の閏土の忘れえぬ形象に，≪阿Q正伝≫にでてくる未荘の貧民の描写に，何千年のあいだ何百万という中国農民の運命であった悲劇をはっきりとみて，それを形象化したことである。しかし，魯迅はほかのものも見た——こゝにかれの偉大さがある——それは，健康な精神をもつ庶民の道徳的美点であり，よりよき将来は彼らによってえられ，また必ずそうなるのを信じたことである。

魯迅の小説≪小さい出来事≫はその輝かしい例となるかもしれない。小説の題材となる事件そのものが，あまりたいしたことではない。車夫は損とはしりながら，貧しい老婆を助けるために車をとめる。しかし作者はこのありふれた事件に乗客のあさましい利己主義と対比して労働者の精神の高みを見ている。この人道的行いが直接影響するところがおゝきい。小説を書いたかれは無関心でいられなかった。≪わたくしは急に，何ともいえないおもいに，おそわれた ——車夫の姿が……大きくなってゆき，遠ざかってゆけばゆくほど，ますます大きくなるように思われた。そして，かれを見るためには見上げねばならなくなった。車夫からはなんともいえない力がでてきて，わたくしにのしかゝり，肌着の下深くかくれている，≪チッポケな人間」を追い出すように思われた。車夫のけだかい行いは作者の道徳的規範となった。≪この小さい出来事はいまなお眼の前にたちはだかり，わたくしを恥じいらせ，わたくしを向上させ

てくれる。それはわたくしの勇気を奪いたゝせ，わたくしの希望をつよめてくれる≫。

こうして，魯迅は道徳，たゝかう勇気と希望は人民からでているとして，新民主主義革命に加わっていた先進分子の立場から，道徳・倫理，≪人民とインテリ≫の問題を解決している。

≪故郷≫のおわりに表象されている道はすばらしく詩的である。≪希望とは，もともとあるともいえないし，ないともいえない。それは地上の道みたいなもので，歩く人がおゝくなると道になるのだ≫。作者は，子供たちがおとなになったとき，その希望が実現されることを信じた。≪高い壁でへだてられることなく，苦しい放浪生活にもおちこまず，愚鈍にもならず，不幸や怨みもないようにとおもう。かれらはわたくしたちのしらない，あたらしい生活をしなければならない≫。

≪吶喊≫と≪彷徨≫の作品は，うら悲しい，ときとしては悲劇的色彩がつよいにもかゝわらず，≪故郷≫と≪小さい出来事≫では，作者の希望がいつかは実現されるという，生活肯定の確信にもとづいている。

もっと後期（1926—1933）の文学評論で，魯迅は中国を建設するあたらしい戦士——コミュニストの形象をつくりあげた。そのなかには，北京の女子学生劉和珍，詩人柔石，中国共産党創立者の一人李大釗教授がいる。そしてさいごに，1934年—1935年には，≪故事新編≫に收められている≪理水≫と≪非攻≫で，作者は人民につかえたいさおしと，天災や戦禍とたゝかったことをたたえている。このような主人公があらわれたということは，二十年代のおわりに≪確信をもってコミュニスト≫（毛沢東）になった魯迅の作品では，あたらしい段階——社会主義リアリズム——がはじまったことを意味した。

魯迅の改革は，作品の内容と思想傾向の面だけにとゞまったのではなく，文学のあらゆる方面にわたっている。何にもまして指摘しなければならないのは，原則上魯迅の小説の形象をつくった，あたらしい方法である。中国の古典文学——戯曲，小説では，ふつうれぞれの人物がにかよった一つ，またはいくつかの性格的特徴，たとえば勇気，忠実，冷静な智慧などが具象化されてい

る。その人物の行為や敍述のディテールはみな，この支配的な性格特徴を表現することにある。その形象はうきぼりのように，はっきりしているが，≪おなじ類型≫のものである。魯迅の小説はいちばん短かいものでさえ，人物の姿は複雑であり，あるばあいにはおしのけあっている矛盾した性質が多様にむすびついて，生活肯定の性格をつくりだしている。孔乙己がそれで，かれの形象にはインテリゲンチャの傲慢さと，子供たちにたいする内気なやさしさ，率直さと，ぎこちない自己偽瞞が仲よくいりまじっている。おなじ嫌らしい人物でも，偽善者と俗物の方玄綽の多面的性格は≪端午節≫にみられる。阿Qの形象はひじように複雑でゆたかなので，研究者は長年多種多様な解釈をしている。こゝには形象の発展があり，村人の不幸と革命の影響により，阿Qの性格に，あたらしい，どうにもならないといった，社会的抗議の思いがどうしてあらわれたかがしめされている。

すぐれたリアリストの魯迅は，典型化の芸術を心にくいまでもちいた。≪故郷≫の閏土の形象，閏土のかたくなさと勤勉，その迷信と主人にたいする卑屈さには，中国農民の集体的な映像が，もっと正しくいえば，解放の道にはとおいかれの運命がある。孔乙己の悲劇的運命には，国家試験廃止後の変化に順応できなかった下層封建インテリゲンチャの典型がある。同時に，魯迅の主人公たちは，たんに一定グループの人びとの≪代表者≫ではない，どんなばあいでも，人物の個性をとおして，一定グループの共通な特徴があらわれる，欠点と長所をもった人びとである。すでに見たように，孔乙己の特徴は蔑視と嘲笑を買うだけでなく，善良で，子供たちにやさしく，悪気がない。しかし，かれのまわりの世界はあまりに不正だったので，その長所も，あわれな人にあらたな苦しみをあたえただけだった。魯迅の筆になる人物の典型的特徴と個性は，かれのえがいた画像の明確さと説得性をつよめながら，混りあっている。

魯迅の才能には，もうひとつの特徴がむすびついている，それは心理分析の深さ，祕められた思いと，登場人物の心理をつたえる手腕である。この特徴がとくにはっきりあらわれているのは，インテリゲンチャの生活をあつかった作品である。≪傷逝≫と≪孤独者≫には過渡期の人びとの不安な精神があらわ

れている。≪端午節≫と≪兄弟≫の主要人物の心理には偽善と卑怯な機会主義がばくろされている。とくに沛君が重病の弟のベッドにつきそいながら，心ひそかに算盤をはじいている場面は印象的である。同僚たちが肉親愛といった，この男の利己的でチッポケな根性は，沛君の内心の独り言にあらわれている。

これまでの中国文学では人物の心理過程を主として人物のうごきによってあらすのが特徴だっただけに，魯迅の心理主義のあたらしさはひときわめだつ。むかしの中国文学では日常性のものか幻想的または歴史的内容の小説がおゝく，たいせつなことは刺激的な局面と劇的題材であった。魯迅によって中国文学に心理小説のあたらしいジャンルがうまれでた。魯迅はあたらしいヨーロッパ文学の成果をよりどころとして，主人公の心理をみせる方法，たとえば，内心の独り言，作者の思索，追憶などの方法をあらたにひろくもちいている。

リアリスチックな内容には，いきいきとした，誰にもわかることばがいる。この面で魯迅はいちじるしい貢献をしている，かれは聞いてわからない≪文語≫をしりぞけて，古典小説に用いられている≪ふるい口語≫を，あたらしい語彙と措辞の方法でゆたかにし，はなしことばに近づけた。同時にかれは豊富なむかしの文学言語を文体論的にひろく利用し，ひからびたことばにならないように気をくばって，表現力をたかめている。

＊　＊　＊

1919年の雑文に魯迅は書いている，≪進歩的芸術家！これを，わたくしは中国美術界にもとめる。芸術家にすぐれた技巧のなければならいことはいうまでもない，しかしそれにもまして，進歩的思想と高潔な人格が必要である……われわれがもとめるのは，道をさししめす先覚者になるような芸術家である……≫

魯迅じしんがこういう芸術家であった。かれは戦士のせんとうにたち，中国革命とともに成長し，才能がみがかれた。かれの作品では批判的リアリズムが最高度に発展している。プロレタリアートに指導された民主主義命革につか

えるリアリズムには，かぎりなく発展し完成されてゆく可能性がある。晩年の魯迅は，中国ではじめて社会主義リアリズムをはじめた一人，マルクス主義文学理論とソヴエト作品を宣伝した一人として，この可能性を現実化することができた。

魯迅の作品は，中国の文学生活のあらゆる方面で，はかりしれないほど，ふかい影響をあたえた。この偉大な作家のおもな遺訓をあげれば，生活の真実にしたがい，人民の牛となり，進歩的世界観をもつことをうつたえたことである。